

国立看護大学校図書館 特別展示

# 「女性の歴史を紡ぐ— お産の歴史的物品と資料」



## ごあいさつ

皆様、本日は国立看護大学校図書館の特別展示によるご来館ありがとうございました。2001年に開館した本館は、これまでたくさんの方々を支えられて成長して参りました。開館20周年を迎えた2021年には、国立大学図書館協会ビジョン2025に準じた発展を目指し、ミッションや将来計画を策定いたしました。また、令和5年度からは、ポストコロナの図書館として、今まで取り組めなかったミッションの「交流支援と対話の促進」「知の開放と社会貢献」に力を入れ、他の図書館との交流・ラーニングコモンズの開設・図書館空間の利活用促進を進めて参りました。

そして今回、「読む」を中心とした図書館空間の新たな試みとして、「見る」空間の創出—特別展示「女性の歴史を紡ぐ—お産の歴史的物品と資料」を開催することとなりました。「お産」は、生命の尊厳と人間存在の哲学を問われる場であり、本学の教育理念である「人間存在の理解」「深い洞察力と共感」「生命の尊厳と自由を貴ぶ倫理観」を養うに相応しいと感じております。

しかしながら、博物学に門外漢の私たちが、開催決定から開催まで時間が短い中でできることは限られておりました。例えば、本の目録は作成できたのですが、歴史的な物品については情報が不足した状態となっております。ですから、本展示会は、「お産」に関わられた多くの方々に足をお運びいただく中で、対話を通じてご経験や知恵を拝借しながら、時とともに発展していくものとなると思われま

す。また、特別展示開催はもう一つの試みとして、地域の方々との交流を目指しました。国立看護大学校の前には、四季折々の花が咲きみだれる「清瀬中央公園」や清瀬市の知の拠点である「清瀬市中央図書館」がございます。子どもたちの歓声が絶えない、気持ちの良い公園があり、多くの市民の方々が中央図書館を訪れます。本学図書館の入館には事前予約が必要ではございますが、皆様には少し足を延ばし、ご来館いただくことを願っております。今回の特別展示を小さなきっかけとして、本学図書館と清瀬市との関係がより開かれたものとなれば嬉しく思います。

18世紀のスウェーデンの博物学者、カール・リンネは「すべてのものに疑問を抱け、たとえ何の変哲もないものでも。」と語りました。本図書館はこれからも、利用者の皆様の疑問に寄り添い、共に学びを深化させ、学問の発展に貢献して参りたいと思います。最後になりますが、本展示会の開催にあたり、ご尽力・ご支援を賜りましたすべての皆様に心より御礼を申し上げます。

(国立看護大学校教授 図書館長 本間典子)

## はじめに

このたび、国立看護大学校図書館において、お産の歴史的物品や資料、書籍の展示を行う運びとなりました。すべての展示物は、約 20 年前に閉館となった新宿区の「お産の博物館」より本学教員が一時的に譲り受けたものであり、お産の歴史を多くの方々にご覧いただきたいと、展示を企画いたしました。展示物のうち最も古いものは安永 6 年（1777 年）のもの、多くのは大正から昭和初期のものです。そのため、中には劣化が進み、手に取って見ていただくことができないものもありますが、近くでご覧のうえ、それぞれの立場でお産の歴史を感じていただければ幸いです。

お産の歴史は女性の歴史の重要な部分に位置付けられます。お産は昔も今も女性にとって重要なライフイベントであり、世界中のどこでも行われている女性と家族の営みです。その進化や変遷によって女性の尊厳や社会的地位も大きく変わってきました。それとともに、お産に立ち会う人の役割変化や女性を取り巻く社会変化も起こりました。

本展示では、日本が大正から昭和初期の二度の大戦を経験した時代に、周産期環境が目まぐるしく変化した様子を展示物や資料で紹介します。また、江戸時代の産科医術書や大正時代の産婆学書、昭和初期の助産婦教科書等、お産に立ち会う医療者の教育の歴史やお産にかかわる技術の進歩がわかる貴重な書籍を紹介します。展示する書籍の一部は国立国会図書館に蔵書があります。しかし、日本には女性に特化した博物館はないため、展示物品については、いずれも全国の各地で僅かずつ保存されているのみで、本展示のように一度に多くのものを図書と合わせて見ることはできません。

この展示は、国立看護大学校の学生や教職員だけでなく、各地の医療者や地域の方々にお産の歴史と女性の歴史を豊かに織り交わした体験を提供することを目的とします。

（国立看護大学校 准教授 渡邊香）